＜エッセイ＞
Future Funk でクラブを JACK する！
—FUTURE JACK による Future Funk パーティー実践—
Taking Over the Club with Future Funk!
— How FUTURE JACK Rocks the Future Funk Dancefloor

下川詩乃*

Una Shimokawa

Ⅰ. はじめに

筆者は社会学系の大学院生としてナイトクラブを研究する傍ら、Future Funk のトラックメイカーおよび DJ として活動している。そして、2 年ほど前から関西圏の Future Funk パーティーである「FUTURE JACK」の主催を務め、国内外のフューチャーファンカー†と共に京都や大阪でパーティーを続けている。本稿では、FUTURE JACK でのパーティー実践を振り返りながら、筆者自身が Future Funk という音楽とどう向き合ってきたか、そして現場に立ち続けるからこそ見えてくる問題を綴っていきたい。

Ⅱ. Future Funk とは？

1. 思想がないのが思想

まず、Future Funk という音楽ジャンルについて改めて考えていきたい。筆者がこのジャンルに出会ったのは大学 1 年生の頃で、以来 8 年ほど聴き続けている。

Future Funk とは、2010 年代にインターネット上で生まれたサンプリングミュージックであり、同時期に同様の手法で人気を博していた Vaporwave の派生ジャンルとして知られている。Vaporwave は、消費主義的な大量生産・大量消費への批判を動機として、80 年代の日本の「シティポップ」を皮肉るように引き延ばし、カットアップする技法によって制作される。当時の日本の CM などの音声を織り交ぜながら、過剰なまでに引き延ばし反復するその作り方からは、ある種の強いメッセージ性を感じ取ることができる。

一方 Future Funk は、サンプルの選び方やカットアップ、日本語の音声を使う手法こそ Vaporwave から引き継いだものの、そこにあった思想のみを削ぎ落としたような音楽である。シティポップやファンク、ディスコ、フュージョンの BPM を 125 前後にまで引き上げ、キャッチーなリフを何度も繰り返し、ファンキーなベースでダンスを誘うサウンドからは、「難しいことはどうでもいいから踊ろう」という思いが伝わってくる。Future Funk はとにかく踊れたらなんでもよく、この「思想のなさ」がある種の Future Funk の思想だと筆者は考えてい

---

* 関西学院大学社会学研究科

† Future Funk のクリエイター、愛好家らの俗称。

る。これは、Future Funk をプレイ・制作する人びとからも同様に感じられ、ジャンル全体に緩やかに広がっている空気であるように思う。

２．Daft Punk の精神

Future Funk を語るうえで忘れてならないのは、Daft Punk を代表としたフィルターハウス・フレンチハウスからの影響である。フューチャーファンカーの Daft Punk へのリスペクトは凄まじく、ある Future Funk レーベルは、Daft Punk のジャケットを模したアパレルを販売しているほどである。

フィルターハウスを聴いていると、そのサウンドが Future Funk としてパッケージ化されていない無骨な Future Funk であることに気がつくだろう。Future Funk の楽曲では、イントロやアウトロ、ブレイクでローパスフィルターが高頻度に使われる。これは Future Funk の重要な要素のひとつであり、その参照元はフィルターハウスにある。

Future Funk のビートに注目してみると、四つ打ちのキックに 2 拍目と 4 拍目のクラップ・スネア、8 分のハイハットはハウスそのものである。そこにファンクやディスコのリフを重ね、ファンキーなベースを乗せたのがフィルターハウス・フレンチハウスであり、これが Future Funk の原初の形と考えられる。つまり Future Funk は、フィルターハウスにさらに日本的なサンプルや要素を混ぜたサウンドなのである。楽曲によっては、フィルターハウス色の強い Future Funk もあり、海外のフューチャーファンカーには特に人気が高いようである。この「Daft Punk の精神」を持っているサウンドこそが Future Funk の大きな特徴であるといえる。

３．80 年代の日本への郷愁

Future Funk の最後の、しかし最も重要な要素が「日本」である。サンプルとして日本の楽曲が多く使われていることはもちろん、『美少女戦士セーラームーン』や『うる星やつら』といった日本のアニメ映像をアートワークとしてよく用いることも、Future Funk を語るうえで欠かせない特徴である。Future Funk による日本的な要素の使用は、大きく以下の三つの側面から整理することができる。①サンプル、②アートワーク、③アーティスト名・タイトルである。

①の日本語楽曲のサンプル使用は、Vaporwave から引き継いだ最大の遺産だといえる。埋もれていた 80 年代のシティポップを掘り起こし、世界的な再評価のきっかけをつくったことは、Future Funk の功績のなかでも特に大きい。時折、意味の取りにくい不自然な日本語歌詞のカットアップが見られるのも、海外のトラックメイカーの手によるものが多い Future Funk ならではの味わいだといえる。②のアートワークもまた、ジャケットや MV に日本のアニメ映像を用いることで、聴き手が楽曲を聴く前から「これは Future Funk だ」とわかるようになっている。実際、「Future Funk＝セーラームーン」というイメージはすでに定着しており、Future Funk において、アートワークと楽曲は分かちがたく結びついている。③のアーティスト名や曲・アルバムタイトルに日本語を用いる手法は Vaporwave にも見られるもので、2010 年代のインターネット発のジャンルらしい遊び心を、今も色濃く残している。不自然な日本語訳や、英語と入り混じったタイトルも、人目を引く Future Funk や Vaporwave ならではの特徴である。

以上の三つの要素が重なり合い、聴き馴染みの良い日本語楽曲を速く高く、ダンサブルかつファンキーにハウス調にエディットした、「Future Funk」という音楽ジャンルが確立している。

Ⅲ．FUTURE JACK

１．Future Funk をクラブで聴く

筆者は「Future Funk をクラブで聴きたい」という思いのもと、二年ほど前から FUTURE JACK という Future Funk のパーティーを関西圏で主催している。「FUTURE JACK」という名称には、テンポの速い曲ばかりがもてはやされがちな現在のクラブシーンを、BPM が 125 ぐらいの四つ打ちの Future Funk でも JACK していきたいという気持ちが込められている。

FUTURE JACK はこれまで、繁華街にある規模の大きめなクラブのワンフロアや、フードやドリンクが充実したミュージックバー、眺望の良い開放的な野外のルーフトップ、エンターテインメント色の強いポップな体験型レストランなど、様々な場所で実験的に開催してきた（図 1）。ありがたいことにこの活動は海外のフューチャーファンカーにまで届いており、彼らが来日するタイミングで出演の希望をもらうことも多く、これまで国内外の多くの DJ に出演していただいてきた。

FUTURE JACK を続けるなかで、印象に残っている夜がいくつかある。海外のフューチャーファンカーのために企画したパーティーでは、一般客も気軽に立ち寄れる立地のミュージックバーで開催したところ、想定以上の人が集まり、フロアが大盛況になった。筆者が制作した Future Funk に合わせて多くの人が踊ってくれている光景は、これまで思い描いてきたものがようやく形になったと感じられる瞬間だった。

他にも、著名なアーティストを招いたパーティーでは、遠方からの来場者を含め多くの人が集まり、良い音で Future Funk を楽しんでもらうことができた。ただし、同じ会場での開催を重ねるなかでは、天候などの事情もあり、思うように人が集まらない時期もあった。筆者は Future Funk をハウスに連なる音楽として捉えているが、ハウス目当てで来場する海外の客の反応は、必ずしも一様ではないと感じることも多い。

また、体験型レストランでの開催に挑戦したこともある。告知の段階から反響があり、当日も様々な地域から来場者が集まった。会場への貢献という点でも、一定の手応えを感じられた回であった。ただし、こうした話題性がいつまでも続くとは限らず、継続的に人を集められるかどうかは、今後も課題として残っている。

図１　FUTURE JACK の様子（筆者撮影）

２．Future Funk はクラブで聴けるのか

クラブで Future Funk のパーティーを続けているからこそ、「Future Funk はクラブで聴けるのか」という問題にも直面している。つまり、「Future Funk はクラブで聴き耐えうる音楽ジャンルなのか」という問題である。おそらく多くの Future Funk は、そもそもクラブで流れることを想定して作られていない。サンプルを短く刻んで繰り返すカットアップの技法は、家やヘッドホンで聴くぶんには心地よいフックになる一方、クラブで流すとどこか物足りなく聴こえてしまう。また、イントロやブレイクで多用されるローパスフィルターは、独特の浮遊感を生み出す一方で、低音域の輪郭をぼかしてしまいがちである。ハウス特有の、はっきりと身体に踏み込んでくるような低音と並べたとき、Future Funk のサウンドはどうしても「軽く」「ぼわっと」聴こえてしまう。ハウス目当てで来場する客の反応が芳しくないと感じることが多いのも、この音の輪郭の違いによるところが大きいのではないかと考えている。

また、「Future Funk の DJ は難しい」という言説についても向き合わなくてはならない。Future Funk の楽曲は全体で 3 分未満の短いものが多く、また、イントロも 8 小節程度しかないものがほとんどであるため、ミックスが非常にしにくいことは否めない。一方、ハウスは DJ 用の Extended バージョンがリリースされることも多く、はじめの十数小節はキックやハイハットだけなど、そもそも音楽ジャンル全体として構成が「クラブで繋げやすい・聴きやすい」ものとなっている。

この現状を打破するためには、フィルターの使い方や低音域の作り込みも含めて、クラブでの再生に耐えうる音像を持った Future Funk を発掘する、あるいは自ら制作していく必要があるのではないかと考えている。ローパスフィルターを多用しすぎず、低音の輪郭をきちんと立たせること、曲の構成をクラブユースに整えることなど、見直せる部分はまだ多く残されている。Future Funk の音楽的な質を高めていくことで、私たちはようやく、クラブで Future Funk に合わせて踊ることができるようになるのだと考える。

Ⅳ．おわりに

はじめは、ただ楽しいという気持ちだけで FUTURE JACK を続けていた。しかし主催を重ねるうちに、忙しさや負担を感じながらも「自分がやらなければ」という気持ちの方が強くなってきているように思う。それでも、こうして Future Funk に耳を傾けてくれる人がいることは、何よりの励みである。そして、共に出演を続けてくれる仲間や、いつも踊りに来てくれるお客さんと出会えたことは、この上ない幸福だと感じている。

Future Funk は踊るための音楽である。10 年前には日本においても音楽ファンの間で一世を風靡し、「若者の流行りの音楽」となっていた Future Funk は、今や「過去の音楽」になってしまっている。今一度、このハッピーでファンキーな音楽で踊れるよう、FUTURE JACK はクラブを JACK し続ける。